

優秀賞

テーマ：医療と福祉、わたしの体験 「私が思う『福祉』」

群馬県立吾妻高等学校3年 岡部千尋

「ありがとう。私は本当に幸せだよ」その言葉を聞いたときになんともいえない喜ばしさを感じたのを今でも忘れません。

私は高校で福祉科に進学しました。自分の学びたい分野だったので授業や演習などで、知識や技術を身に付けていくのは、自分の成長の第一歩なのだとわくわくしていました。一番最初の授業で「福祉」について考えたときに、私の中では、まだ曖昧な答えしか思い浮かびませんでした。時は流れ、高校にも慣れ、実習も数回終えた頃でした。私は足に怪我を負い、しばらく車椅子の生活になりました。その時思ったのが、大変不便だということ、周りに迷惑をかけ、なんて情けないんだということでした。自分で何もできない。お手洗いにいく時でさえ助けがいる。とても辛い時期でした。ある日私が、いつも手助けしてもらっている友人に言いました。「いつもごめんね」と。そうすると友人からは「ごめんよりもありがとうって言われたい。私はそう言われた時に幸せを感じるよ」と。友人から、ごく当たり前のようには言われましたが、その言葉は私の心の中にスッと入ってきました。確かに、私が友人の立場だったら同じことを言うと思うし、私自身、ありがとうと言われると、ほっこりした幸せを感じます。私はその時ふと感じました。これは「福祉」なのではないのかと。いろいろな幸せがありますが、福祉イコール幸せという意味をもつと思います。私たち援助者という立場からすると、利用者の方の思いに添った支援をしていく、利用者の方が幸せだと思ってくだされれば、私も幸せな気持ちになる。「みんなの幸せ」と「自分の幸せ」を合わせて「福祉」なのだと、「自分を支えてくれる人がいる」それこそ、本当の「福祉」なのではないのかと。私はそこで初めて、自分の中で「福祉」とは何か、という答えを導き出すことができました。

答えを出すことができた私は、普段の授業はもちろん、施設実習でも「福祉」について常に心に思い浮かべました。三週間という長い実習の中で、ある利用者の方に出会いました。その方はとても無口で、必要最低限のことしか話さない女性の方でした。しかし、実際関わってみると、その方は無口なのではなく、ただ人と話す機会が少ないため言葉が話さなくなったということをご本人から聞きました。首を振るジェスチャーだけで職員の方とコミュニケーションを取ることは可能ですが、私は、もっとこの方の声を聴いてみたいと思い、その思いを知ってから積極的に「コミュニケーション」を取りました。食事介助、入浴介助、排泄介助など行ってきましたが、この方に合った介助方法がな、きちんと援助ができていくかな、そんな考えを抱えながら実習は最終日を迎えました。夕方、私がある方の横を通ったときに、引き止められました。それは初めてのこと、少し驚きましたがいつもと同じようしかがみ、目線を合わせて「どうしましたか」と聞きました。そうするとその方が笑顔でこう言ったのです。「ありがとう。私は本当に幸せだよ」と。この言葉を聞いたとき、今まで抱えてきた考えや思いが一気にほじけ、なんとも言えない喜ばしさが残りました。そして同時に、幸せも感じました。まさにこの瞬間、「福祉」を身を持って経験したのです。

あなたが思う「福祉」とは何ですか。様々な考えがあると思います。私は、自分で導き出した答えをもとに、これから「福祉」に携わっていきたいです。